「もとはこちら」のお話し

№52　今月のテーマ　今、なぜ　日本が　（日本の使命）

北原ゆり筆

未曾有の大地震、大津波、それを引き金にして起きた原発事故。今、私達は大混乱の中にいます。

経験したことのない大惨事を前にして、そのあまりの悲惨な姿に、初めはこれが現実の出来事とは信じられない思いがしました。そして刻々と映し出される映像やニュースをみながら、一体、私達はどうすればいいのだろう、この先日本はどうなるのだろうと、暗澹たる思いが駆け巡りました。

それでもみんな、必死で気持ちを奮い立たせ、直接被害を受けた人も、そうでない人も夫々が夫々の立場で、いま皆が一つになって立ち上がろうとしています。

復興の活動は、もう始まっています。どんどんと進んでいます。泣いている暇、嘆いている時間など、どこにもありません。

復興のための大音響が、日本中にとどろき渡っています。

救援物資を提供する人、それを運ぶ車の列、計画停電に絶えて協力する人々、そして仮設住宅を用意する自治体、受け入れようとする地域、医療関係者等々、夫々が自分がするべき事、自分に出来る事を考え、最高の知恵を出し合い、冷静に行動しようとしています。

日本で起きた事を、そして立ち上がろうとする私達の傷ついた姿を、世界中が凝視しています。

対岸の火事として、のん気に日本を眺めている国など、どこにもありません。

「今日は他人(ひと)の身、明日はわが身」という言葉がありますが、この地球上で起きた事は、世界中どこででも、そして明日どころか一瞬先に、我が身の上に起こる可能性があるからです。

今はとにかく命を救う事が先決です。

国中挙げて原発事故を収拾させ、混乱を取り除く事も、最優先しなければなりません。

しかしそれと同時に、いま私達が早急に考えなければならない事が、もう一つあります。

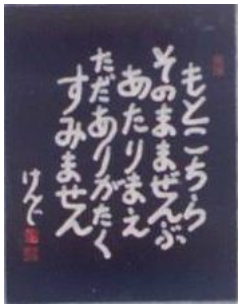
それは、数ある世界の中で、今なぜ私達のこの日本が、こういう大惨事を体験しなければならなかったのかという事です。

無礙三昧(むげざんまい)

今日あるのは
　きのうあってのこと
明日あるのは
　今日あってのごとく
今世あるのは
　前世あってのこと
来世あるのは
　今世あってのこと
生死は昼夜覚眠のごとく
　一如なり

されど　三世を超越して
不生不滅なるが　真我なり
生きて楽し　死して楽し
あゝ　楽しい無礙三昧

合掌　けんじ



平井謙次作

大きな視野に立ち、今回の天災人災が何を意味しているのか、私達はこの大惨事から何を学ぶべきかをしっかりと考えなければならないと思います。これからの進むべき方向をしっかりと見極める為にです。

変化し続ける　日本という国

昔から日本は火山の国であり、地震国でありました。私達は常に揺れ動く大地の上で生きてきました。

しかし日本で動くのは、大地だけではありません。世界でも珍しいと言われる程、日本ははっきりと分かれた四季のある国であり、季節の移り変わりも非常に激しい国です。

私達は、激しく移ろい変わる自然の中で生きる、という宿命的なものを持った民族なのです。「常に変化し続けている」という事は、「古いものにとって代わって、常に新しいものが生み出されている」状態にあるという事です。

（平井謙次著）

元々日本人は、非常に変化に強い人種です。

気候風土だけでなく、外から新しく入ってきたものを上手に取り入れ、古くからあるものとうまく融合融和させる事で、それまでにはなかった独特の新しい文化を築き上げてきた民族です。

大陸から渡って来た文化や宗教なども柔軟に受け入れ、それらを日本の風土に合うように発展させてきました。

また明治の開国以来も、西洋の新しい文化や学問などを次々と積極的に取り入れ、それらを従来の日本のものと上手に混ぜ合わせる事で、より良いものを創り上げてきました。そういう営みによって私達はこの日本を近代化させ、発展させてきたのです。

その結果、例えば食生活ひとつを例にとってみても、日本は世界に類を見ないほどの、豊かな食文化の国になりました。

食材の豊かさという点においても日本は世界一と言われるほど、世界中から多種多様な食材が集まってきています。

珍しいもの好きで、異国から入ってくるものを喜んで受け入れ、それを新しくアレンジして更に素晴らしいものに創りあげていくというのが、私達日本人の特性であり、国民性でもあるのです。

また多様性という事からいえば、元々日本は世界の中でも特異な存在のようです。植物の種類の多さという点などでも、世界に類を見ないほど多くの種類の植物がこの日本に自生しているのです。

私達の国この日本は、まるで世界中の物を集めたサンプル箱の中の宝物のように、世界中から様々な文化や生物が集まってきて、共存・発展しながら、小さなこの国の中でキラキラと輝いているのです。

日本の役割

ところで世界は今、様々な問題に直面し、待ったなしの大きな岐路に立たされています。例えば地球温暖化の問題です。

温暖化による地球の危機が叫ばれ、日を追うごとに益々その状況はひどくなってきています。今までの様な生ぬるいやり方では、もう地球全体が駄目になるという事は、誰の目にも明らかです。

しかしそんな中でなお各国は、夫々が自国の利益を最優先する事に汲々としていて、いまだに協調できずにいます。

その状態はまるで、乗り合い船が今まさに沈みかけているというのに、「お前の荷物を先に捨てよ」と互いに言い合っている様なものです。この際守るべきものは荷物ではなく、皆が乗っている船そのものであり、そして乗っている全ての人の命のはずです。

自分の命を守るために、他人の荷物を捨てさせようとして、互いに譲らず責め合い、誰の荷物が重いか軽いか等と議論しているのです。しかしそんな時間は、もう私達にはない筈です。

（平井謙次著）

この地球温暖化問題以外にも、高齢化問題というのがあります。

日本は、かつてどの国も経験した事のない程のスピードで、人口の高齢化が進み、減った生産人口で国全体をどう守り、どういうふうに運営していくかという事が、差し迫った大問題として目の前に

突きつけられております。

素晴らしい人間が沢山いるという人的資源以外にはさしたる自然資源を持たず、苦悩する日本の姿を諸外国は固唾を呑んで注視しています。日本のこれからのやり方、進む方向を観て、自分達の国の参考に、あるいはお手本にしようとしているのです。

そしてまたこれは今更の話ではありますが、原爆が投下された国は、世界中でこの日本だけです。図らずも日本人は、人類の代表として原爆に遭い、その悲惨な姿を世界に見せる事で、「人間は絶対に核戦争などをしてはならない」という事を、強く世界中の人々に訴えかける結果になったのです。

温暖化防止のために先進国の先頭に立って京都議定書を提出した日本、高齢化問題のさきがけ的な立場にある日本、原爆に遭った日本、これらの事と、そして世界中のものが集まってくる国という事などを考え合わせると、今回の大地震・大津波、そしてそれに続く原発の事故がこの日本で起きたという事を、単なる偶然の出来事などとは絶対に思う事はできません。

勿論どんな小さな出来事にも偶然という事はありませんが、今回の場合は特にそうで、そこには人智を超えた何らかの大きな計らいの力が働いたという気がしてなりません。

（平井謙次著）

方向転換の梶を切れ

エネルギーを作り出す手段として、原発ほど危険なものはありません。その事はずっと言われ続けておりました。しかし昨今諸外国では、原発の設置をどんどん増やそうという動きに拍車がかかってきておりました。

自然の力や原子の持つ力を侮り、原発の危険性は回避できるとタカをくくっていたのです。そんな中での、今回の日本の惨状です。原子の破壊は、即ち原子力発電は、やはり人類の破壊に繋がっているという事を、私達は改めてはっきりと知らされたのです。

世界中が原発の危険性を再認識し、その結果、開発を見直し、歩みを止める方向に行く事は確かです。

そしてエネルギーの無駄遣いをやめると共に、早急にクリーンで安全な自然エネルギーの開発を急がなければならない事を、誰もがより強く感じた筈です。一刻の猶予もありません。急がなければ地球は滅び、人類は滅亡するという事を、世界中が日本のこの姿からはっきりと悟った筈です。

日本は原爆に続き今回もまた、本当に大きな、大きな、大きな人的・物的な犠牲を払いながら、「自然災害が引き金になって起こる、原発事故の恐ろしさ」というものを、世界に向けて発信する結果になりました。

この様に、どういうわけか私達のこの日本という国は、原爆にしろ、原発にしろ、人類が間違った方向に行こうとするその危険性を、自らが多大の犠牲を払いながら他の国々にも知らせ、安全で幸せな道に人々を導いて行くという大きな使命を担わされた国のようです。

ところでこの様な大災害にあった私達日本人を、外国の人達はどの様な目で見ているのでしょうか。

報じられてくるものによりますと、彼らは一様に、驚異と感嘆の目で日本人を観ているようです。かつての阪神淡路大震災の時もそうだったのですが、信じられない程の大混乱の中にあってなお、一人ひとりが人としての節度を失わず、秩序を持って冷静に事に当たり、略奪や暴動も起こさず、相手の事を思いやる心を失わない、そういう日本人の、その人間性の素晴らしさに世界中が驚き、尊敬のまなざしを向けながら、心からの救援を申し出てくれているのです。

また、世界中が戦争に巻き込まれた第二次大戦は、日本への原爆投下によって収束しましたが、その時私達日本人は、敵であった相手国を憎まず恨まず、ただひたすらに明るく前向きに物事を考え、希望を持って未来の復興に向かって立ち上がりました。

欧米諸国から多くの事を素直に学び、喜んで支援も受けとり、再興に立ち向かったのです。

その結果、元もとの礼儀正しさや几帳面さ、勤勉さという国民性の

おかげもあって、最近でこそ第三位になりましたが、戦後、本当に何もなかったその中から、信じられないような速さで復興し、日本は瞬く間に世界第二位の経済大国までなったのです。

（平井謙次著）

試練の先にある光

様々なものを受け入れ、明るく積極的に前を向いて辛抱強く歩んで行く、そういう日本が今また再び、大きな試練を与えられました。

それは、かつてない程の危機的状況に置かれている地球や人類を救うために、日本もかつてない程の大きな犠牲を求められ、試練が与えられたという事です。しかしもしも、元々の私達にそういう試練に立ち向かう大きな強い力がなければ、こんな試練は絶対に与えられる事はなかった筈です。

勤勉で辛抱強く努力をする国民性、誰をも恨まず憎まない温和な性格、そして世界中の素晴らしい知恵やモノや文化を集め、その中からより良いものを作り出す、そういう知恵や力を合わせ持った国ならば、危機的状況にある今の人類の先頭に立って、間違った方向から正しい方向に梶を切る事ができるのではないか考える何らかの大きな力が働き、その結果、この日本が選ばれたのだという見方ができるのです。そしてこの見方・考え方は、決して的外れではないと思います。物事には決して、偶然という事はないからです。

この大災害を前にして、人種の違いも主義主張の違いも乗り越えて、心をひとつにした世界中の人々が、世界中の知恵が、そして世界中の善意が、この日本に集まってきています。世界中の総意を結集し、地球の、そして人類の困難を乗り越える場として、この日本が選ばれ、そしていま動いています。新しい世界への模索が、即ち危険のない新しいエネルギーの開発やこれからの人類のありかたが、この未曾有の大災害の中から今まさに生まれ出ようとしています。

世界中が集まって、被災国日本を救うという形をとりながら、実際は人類を救う道を、世界中が共に手を取り、歩み始めているのです。どんな大きな困難も、皆が心をひとつにして力を合わせれば、必ず乗り越える事ができる筈です。

人類が一つになる事の大切さを、助け合う事の大切さを、そして一刻も早い自然エネルギー開発の大切さを、原発事故を通して大自然が教えてくれているのです。私達が方向転換できる、今がそのぎりぎりのチャンスかもしれません。

絶望はありません。乗り越えられない困難など、ありません。そしてこの困難を乗り越えた先には、今までよりももっと素晴らしい世界が必ず開けてくる筈です。多種多様なものが一つとなり、力を寄せ合って互いを活かしあう、そういう世界です。そういう今までにない新しい時代を造る力が、私達一人ひとりにはあるのです。

それを信じ、くじける事なく、今は自分に出来る事を一歩一歩やっていく事です。誰かがそれをするのではなく、自分がそれをするのです。

無駄な電気を消し、代わりに一人ひとりが自分の心の中の灯火をつけ、自分の足元だけでなく、他人の足元をもしっかりと照らすのです。

他人とは、他人の姿を借りた、もう一人の自分です。

地球も自分も、同じ一つのいのちの現れです。

（平井謙次著）

〔ご案内〕

四月の勉強会は、**四月二日**（土）午後七時からです。

次回は、五月七日（土）午後七時からを予定しております。

皆様のご参加を、お待ち致しております。

編集発行人　もとはこちら会　資料編集部　北原友也
専用ＨＰ　http://www.motoha-kochira.com
mail:　data3@motoha-kochira.com